

あるうつ病患者の自殺をめぐる遺族の語りにおける責任帰属活動

——動機の語彙，標準化された関係対，述部に着目して——

立命館大学衣笠総合研究機構 藤原信行

1 目的と方法

自死遺族らは、周囲の者らによる遺族らの非難や、遺族自身による自己非難という〈責任帰属〉活動をめぐる問題に直面している。本報告は、2014年5月に自死遺族Aさん（仮名、夫を喪った）に行った非構造化インタビューのデータをもとに、あるうつ病患者の自殺にかんする遺族の語りにおいて遂行された責任帰属活動を（再）記述するものである。とくに本報告では、〈心（偏見）〉に焦点を当てる死生学など他領域の研究とは異なり、〈言語〉運用の水準、とくにそこで用いられる「動機の語彙」（Mills [1940]1963=1971）、「標準化された関係対」（Sacks 1972=1995）、「述部」（Hester & Eglin 1997）に着目し上記作業を遂行する。

なお、インタビューデータの使用については、Aさんより〈個人名〉〈地名（県名までは可）〉、〈法人（集団）〉名を出さないことを条件に、研究発表に使用する許可をいただいている。

2 結果と結論

Aさんは最終的に、檀家となっていた寺の僧侶の〈Aさんの夫の死因は“うつ病”による“病死”である〉という言葉によって、自らの見守りの不十分さ（夫と標準化された関係対に位置づけられるべき自分がなすべき付帯活動を十分に行わなかった）によって夫を死なせてしまったという自責から解放されたと語る。しかし、うつ病という自殺動機の付与は、自殺の主因としてのうつ病の早期発見と寛解のため、ことさら家族員の「気づき」「つなぎ」「見守り」（＝ゲートキーパー活動）の必要性が強調されている今日では、なすべき活動とその過怠が明確化され、むしろ自死遺族への責任帰属を正当化・強化してしまう（藤原 2011）。にもかかわらずAさんは夫の自殺動機としてうつ病を付与したことで自らへの責任帰属を棄却できた。彼女においてゲートキーパー活動（とくに見守り）はあくまで過去の夫の自殺未遂と論理的に結びつけられ、自殺の主因とされるうつ病にかんする精神医学的知識とは結びつけられていなかったからだ。

自死遺族らが否応なく巻き込まれる責任帰属をめぐる活動のより厳密な理解のためには、当該活動における言語使用の水準、「動機の語彙」「標準化された関係対」「カテゴリー付帯活動／述部」の現状における使われ方を経験的に（再）記述しつつけていく必要がある。

文献

- 藤原信行，2011，『医療化』された自殺対策の推進と〈家族員の義務と責任〉のせり出し——その理念的形態について』『生存学』3: 117-32.
- Hester, S. & P. Eglin, 1997, “Membership Categorization Analysis: An Introduction,” S. Hester & P. Eglin eds., *Culture in Action: Studies in Membership Categorization Analysis*, Lanham: University Press of America, 1-23.
- Mills, C. W., [1940]1963, “Situating Actions & Vocabularies of Motive,” I. L. Horowitz ed., *Power, Politics, & People: The Collected Essays of C. Wright Mills*, Oxford, London & New York: Oxford University Press, 439-68. (=1971, 田中義久訳「状況化された行為と動機の語彙」青井和夫・本間康平監訳『権力・政治・民衆』みすず書房, 344-55.)
- Sacks, H., 1972, “An Initial Investigation of the Usability of Conversational Data for Doing Sociology,” D. Sudnow ed., *Studies in Social Interaction*, New York: The Free Press, 31-73. (=1995, 北澤裕・西阪仰訳「会話データの利用法——会話分析事始め」北澤裕・西阪仰訳『日常性の解剖学——知と会話』マルジュ社, 93-173.)